

# 平井権八 小紫口説き

ここに過ぎにし その物語  
国は山陰 その名も高し

武家の家老にや 一子の倅(いっしのせがれ)  
平井権八 直則(ひらいごんぱちなおのり)こそは

犬のけんかが 遺恨となりて  
同じ家中の 本庄(ほんじょう)氏(うじ)を

討ちて立ち退き 東(あづま)へ下る  
下る道にて 桑名の渡し

僅かばかりの 船賃ゆえに  
あまた船頭に 取り囲まれて

すでに命の 危なき処  
救い助けし 一人の御仁(ごじん)

これは名に負う 東海道に  
その名 熊鷹(くまたか) 山賊なるが

それと権八 夢さら知らず  
その家(や) 家中に 美人がござる

名をば亀菊(かめぎく) 蕾の花よ  
その夜 権八 寝間へと忍ぶ

もしや若様 侍様よ  
知って泊まるか 知らいであるか

この家(や)主人は 盗賊なるぞ  
今宵お命 危のうござる

わしも 元々 三河の国で  
三河国でも 長者の娘

去年暮れ方 この家にや捕られ  
永(なが)の月日を 涙で暮らす

故郷恋しや さぞ両親が  
心配している 思いはすれば

お前見兼ねて お頼み申す  
情(じょう)じゃ 情け(なさけ)じゃ 御情(ごじょう)じゃ程に

わしを連れ立ち この家を逃げて  
故郷三河へ 送りてくれと

口説き立てられ 権八こそは  
その夜 訳柄(わけがら) 残らず聞いて

さらばこの屋の 主人をはじめ  
手下盗賊 皆切り殺し

お前故郷へ お連れをいたす  
二人密かに 約束固め

娘亀菊 立ち出でゆくが  
それと知らずに 熊鷹殿は

手下あたまに ささやきかける  
今宵泊めたる 若侍の

腰に差したる 二振りこそは  
黄金(こがね)作りで 名作ものよ

二百両から 先ものゆえに  
彼をあざむき 召し連れたるは

それを奪わん 心のたくみ  
奥の座敷へ 寝かして置いた

最早(もはや)時刻も 夜半の頃よ  
奥の間へ 切り込みすれば

兼ねて権八 心得なさる  
見事平井は 抜く手も早く

あるじ熊鷹 手下の奴等  
ついに残らず 皆切り殺す

そこで亀菊 手を引き連れて  
生れ故郷の 三河に帰る

一部始終の 話をいたす  
長者夫婦は 喜び勇み

どうぞ我が家の 婿にとせんと  
すすめすれども 権八殿は

思う士官の 望みがあれば  
長者夫婦に 断り言うて

暇(いとま)致して 立たんとすれば  
今は亀菊 詮方(せんかた)涙

ぜひも泣く泣く 金取り出して  
心ばかりの はなむけなりと

いえば権八 気の毒そうに  
こころざしをば 頂きなさる

花の東(あづま)へ 急いで下る  
行けば程なく 川崎宿よ

音に聞こえし 万年屋とて  
ここにしばらく お休みなさる

さてもこれから 品川までの  
道は何里と お尋ねすれば

道はわずかに 二里程なれど  
鈴が森とて 難所がござる

夜ごと夜ごとの 仕切りがあれば  
今宵当初へ お泊りあれと

言えど権八 耳にも入れず  
大小差す身は それしきごとに

恐れなしては あまたの人に  
臆病未練の 侍なりと

永く笑われ 恥辱の種よ  
勇み進んで 品川めざす

さても先行く 権八殿と  
同じ茶屋にて 休んでいたる

花の都の その名も高き  
男伊達にて 幡随院長兵衛

平井出て行く 後見送りて  
さすが侍 あっぱれ者よ

さらば若衆の 手並みを見んと  
後に続いて 長兵衛殿は

鈴が森へと 早さしかかる  
その夜場所にて 権八殿は

かねて覚悟と 山賊どもを  
大勢相手に 火花を散らし

それを見るなり 幡随院長兵衛  
さらば助太刀 致さんものと

正に仁王の 荒れたるごとく  
切って回れば 山賊どもは

雲を霞と 逃げゆく後で  
そこで長兵衛 平井に向い

お年若いが 似合わぬ手並み  
恐れ入りたる 働きなるよ

わしも江戸にて 名を売る男  
お世話いたさん 我が家へござれ

言えば権八 喜び入り  
されば今より 兄弟分と

男長兵衛 匿(かくま)いなさる  
さても新七 助人共は 【※本庄氏】

親を打たれて その仇討ち(あだうち)と  
平井見つけて 討ち果たさんと

さても都の 花川戸(はなかわど)にて  
借家住まいで 二人の者は

花のお江戸を 毎日さがす  
それと権八 早くも悟り

忍びねらって 二人の者を  
何の苦もなく 殺してしまい

今は権八 安堵の思い  
心浮き浮き 若気のいたり

花のお江戸の 新吉原に  
音に聞こえし 花扇(はなおうぎ)屋の

小紫(こむらさき)には 心を寄せて  
夜毎毎に お通いなさる

そこで権八 素姓を聞けば  
私や三河の 長者が娘

今は長者も 落ちぶれ果てて  
私や悲しい 遊女に売られ

涙ながらに 勤めをいたす  
あなた様とは 初会の席で

会った時から 心に残り  
どこか見たような お人であろうと

思う心が 先へと通じ  
幸い座敷も 早引きしたい

言って亀菊 床へと入る  
床になつたる その睦言(むつごと)に

さても互いに 顔見合わせて  
思いついたる 以前の話

さては亀菊 権八さんか  
一度別れて また逢うことは

先の代から 約束ごとよ  
二世も三世も その先までも

変わるまいとの 互いの契り  
それが悪事の 起こりとなりて

人を殺して 金取る事が  
夜毎日毎に 度重なれば

毒を食らへば 皿までなりと  
なおも募りて 中山道の

音に聞こえし 熊谷堤(くまがやつつみ)  
上州絹売り 弥兵衛を殺し

百両余りの 金子を取りて  
なおも廓(くるわ)へ 忍びて通う

悪事千里で 権八身分  
その上 恵方(えほう)は お尋ね者よ

ここに目黒の 虚無僧(こむそう)寺に  
忍び入るとも 厳しい詮議(せんぎ)

今は天地に 身の置きどころ  
泣くも泣かれず 覚悟を極め

お奉行様へと お名乗り出て  
哀れなるかや 権八こそは

鈴が森にて お仕置きとなる  
さても幡随院 長兵衛こそは

平井権八 さらした首を  
願ひ貰いて 目黒の寺へ

埋めて葬り 回向をなさる  
そのや噂を 聞く小紫

人目忍んで 廓を出でて  
ひるむ心は 目黒の寺の

平井権八 墓場の前で  
乱れちらした その黒髪に

何と白無垢(しろむく) 死装束と  
姿懐剣 咽喉(のど)へと当てて

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏  
落ちる涙は 千草(ちぐさ)の露よ

平井権八 小紫口説き  
今の世までも 話に残る

一子の倅(いっしのせがれ) 〓

- ① ひとりの子供。
- ② 多くの子の中の一人。特に嫡子